

## 大相撲雑感

かこい かくりく

昔は角賦・角力と記した時期もあった。相撲＝「すま(争)ふ」＝すもう

昭和一衛生まれの私等には公式的な競技では、神社や町内会の祭り行事の一環として行われ「相撲」が一番多く、学校には必ず相撲場を持つて居り、中には屋根付きの土俵を持つ所も有った。休みの時には授業として受けたものであり、私は親から良く言われました、相撲は同じ体格なら技のある者が勝つ、多少の差は幾らでも技で応えるから「お前は、小さいから四ツにがっぶり組まずに足取で行け」と諭されて「三人抜き・五人抜き」で賞を得たこと有り。前から4番以降下がった事なく小さかった。曾て角界の小兵で慣らした舟の海潮が大関小錦を倒した如く。「山椒は小粒でヒリリと辛い」精神で打ち勝って来たが球技は苦手であった。昭和13年コンクリート3階建ての小学校に入学。当時の愛知県豊橋市(終戦時の人口15万人)は日本三大演習場の一つ高師ヶ原(天白原)を抱え、士官学校前に学ぶ幼年学校と全国から馬を集めて訓練する補充馬隊等諸々の部隊と、記憶にあるのは18連隊・工兵隊・陸軍病院などで、習志野原を囲む相橋・習志野と並んで軍都であり。製糸工場の町(群馬県富岡工場公務員的女工さん対し、悲しい物語にも出てくる「野麦峠」を越えて来た女工さんの町)で学校の屋上によって先生から「工場の煙突は何本有りますか」と社会教育を兼ねて産業としての発展ぶりを諭されました、確かに学校は真ん中に時計台つきのくの字の3階建てでゴミ捨ても下に降りることなく各階にダストシュートの口が二箇所あった、さすがに水洗便所までに至らなかったが市が栄えたお陰か、野球道具も皮製のグローブは言うに及ばずキャッチャー・ファーストミットまで有って、2年生ごろ軟球であったが思い切り背中に打球を受けて、嫌気がさし運動に転換、大戦間近からは敵国の競技で禁止となり相撲への奨励が盛んとなった。ましてや、開戦前の昭和15年の双葉山(大分県宇佐市 45.2出身)の19連勝を五ヶ島(長崎県南松浦郡うどんの旨い五島列島出身)が止めた時には、新聞号外を鈴を鳴らしながら配っていたのを子供ながらにもハッキリ憶えている程で、大戦中も年二場所が続けて実施され、昭和19年からは春・夏・秋場所の年三場所となった。しかし、中学生に入った私共は学徒動員となり、大学生は軍隊に中学生は軍需産業(私は木製飛行機作成のための鋳造機現代で言うならば自動木工鋸機の大規模機械)に担任先生共々に動員を命ぜられ運動どころか勉強一つ出来ず終戦と成ってしまった。動員中は軍人は麦飯、工員・学生は脱脂豆粉ご飯には夢った。

退官後(昭59)東京への就職で土曜日に国技館に寄るようになるとともに、隊友会相橋支部常任理事の高木さんのお姉さんの孫(現小結豊真将)が少年相撲全国大会参加と言うことで平成に入ってから轟轟となり、また、同志の小野さんが明治神宮奉納相撲の入場券を手に入れ、そのお誘いから豊真将の応援に足しげく通っていました。

二五〇〇年以前に悠遠多太子(祝迎の幼名)が相撲を取ったことが『本行経』にみえる。日本では農耕儀礼としての神事相撲が行われ、野見宿禰命は相撲の神様としてご承知の事とされます宮中の重要な儀式にも「相撲節会」が（おひらけ）かぞえられるようになってから、蹴る・突く・拳で打つ等が禁止され、今日に近い相撲となり、故に「国技」となる所以となった。

武家相撲時代から勤王相撲へと移り、その勤王相撲も京都から始まり、大阪・江戸と拡がり力士数も関西の方が遙かに多かったが、次第に東北・北海道からの入門が増えて、江戸が中心と成り「江戸会所」(後の相撲協会)が、決まり事を定めて仕切る事となる。現在の部屋数は得て同部屋以外は起当りとなり、師匠の名跡(年寄)を継ぐのが本来であるが、名義を株で買う場合もあり定数は105名、一代年寄(北の湖・貴乃花)もあり。年寄・十両以上の力士は給与と報償金が出ます。幕下以下(要成員と言われ、幕下・三段目・序二段・序ノ口・見習いに分けられ)は場所毎に小遣い程度の手当金が、行司(45名程)・床山(50名程)は各部屋に所属し給与は協会から出ます。幕下以下の給与無しの家食住費は、部屋の親方・十両以上の手当金等で賄えます役力士等に出る養成費も三役以上が居なければ買えず親方は大変です。

賞金は、一本6万円と聞いていますが、協会(退職金の積立等)親方(まわし・着物等)当人で配分している様ですが知部は? 何千万もする年寄株の取得を考えれば、お金も入ります。

本来この稿では、「夢の饗宴物語」で野田総理大臣と小結豊真将の縁を語りたかったが残念。